

終活で人生充実しよう

明海大 シンポ スタートを呼びかけ

明海大(千葉県浦安市)は15日、終活カウ
ンセラー協会の協力で「終
活シンポジウム」を開催
した。超高齢化社会の到
来に伴い、急速に社会的
な認知度を高める「終
活」。500人収容の会
場の大部分が埋まり、参
加者は基礎的な定義やパ
ネリストらの具体的な経
験談を聞き、終活に関す
る理解を深めた。

定義を、「人生の終焉を
考えることを通じて、自
分を見つめ、今をよりよ
く自分らしく生きる活
動」と提示。墓や葬儀、
相続などについての「現
实的な行動」と、趣味や
家族、社会貢献といった
「人生を充実させるため
の行動」を構成要素とし、
いわゆる「死の準備活
動」はその一部にすぎ
ないと主張した。

その後、戸松義晴・浄
土宗心光院(東京都港
区)住職、戦場カメラマ
ンの渡部陽一氏、武藤頼
胡・終活カウンセラー協
会代表理事を交え、それ
ぞれの立場と経験からパ
ネルディスカッション。
これまで100冊以上の
「エンディングノート」
を書いてきたという武藤
代表理事が、来場者に記
入の経験を問い掛ける
と、書ききった人がほと
んどいないという状況が
明らかになった。「どう
しても書けないページは
出てくるが、書くことす
ること考え、見えてく
るものがある。まずは名
前を書くことから始めま
しょう」と提案した。

「エンディングノート」
を問う中で、「家族を守
ること、子どもたちが次
の世代に引き継いでいけ
る環境を整えていくこ
と」が、自分にとって終
活だと考えるようになって
たと話した。

戸松住職は死の問題を
「人生の旅支度」と表現
し、「つらければつらい
でよいが悩むだけでは解
決しない。自分だけの問
題にせず、周りの人に相
談することで一歩踏み出
すことができる。生の延
ことが大事」と語った。
急速に進む高齢化や世
帯数減少により、無縁社
会や孤独死などが社会問
題となっている。明海大
は新年度から、一般の人
が受講可能なオープンカ
レッジで、エンディング

仏教者のケアが必要に

ドイツ人 映画監督 被災地撮影の体験語る



「仮設住宅で生活しながらも、墓現
を直したいと思う人が多い」と
地の被災者の心境を語る

浄土宗総本山知恩院和
順会館(京都市東山区)
で13日から15日まで、東
日本震災に直面した仏
教者の姿を、外国人の視
点で記録したドキュメン
タリー映画「東日本大震
災と仏教」が上映され、
監督を務めたドイツ人の
ティム・グラフ氏(32)が
講演した。

約1時間の映画は、避
難所として寺を開放した
り、遺族のケアに当たっ
た住職らのインタビュー
を中心にしながら、盆な
どの慰霊行事にも焦点を
当て、日本の仏教が基盤
とする先祖供養の持つ意
味に迫っている。

グラフ氏は、ドイツ・
ハイデルベルク大で学ん
だ後、2010年から東
京大に留学し、禅をア
マにした映画撮影に向け

準備を進めていた。震災
直後から、各地で支援活
動を行う僧侶の姿に触発
され、被災地での宗教者
の姿を追ったドキュメン
タリー映画を製作するこ
とを決意。11年4月か
ら、宮城県気仙沼市、仙
台市、岩手県陸前高田市
などで撮影を続けた。完
成した映画は、すでにア
メリカ、ドイツ、スイス
などで上映され、観衆か
ら共感が得られていると

豊かさをエンディング

中外日報協力・NHK講座から

3月

化などで家庭内でもコミ
ュニケーションがなくな
ったことが、その普及の
背景にあると指摘した上
で、人生の末期に関する
さまざまな論点を解説し
た。

福祉の現状や看取りの問
題、多死社会の課題を詳
しく説明した。

そして竹内氏は、「人
生のハッピーエンド」を
迎えるためには「老いる
のがいい」としてまとめ
た。前、病気になる前、死
前、病気になる前、死
ま」といわれる单身世帯
の増加に関連して、「迷
惑をかけない孤独死」の
ずいそこから人生を捉え

に決めて、「自分
史、理念」は「言い残し
たいこと」としてまとめ
るのがいい、と述べた。
ノートは、自らの考え
が変れば何度も書き直
していいので鉛筆で書く
とか、生前に見てほしい
医療の希望と死後の財産
処分などの項目は分かち
書きにして分冊化すると

建設
約20
内閣
(約)
営の
洛和
田圃
会と
者を
ある
ム編
に上
ホー
生ま
が13日に開かれ、京都市
伏見区の総本山醍醐寺境

愛する者へ思い伝える

NHK文化センター京
都教室(京都市下京区)
の市民講座「豊かなエン
ディングを創る」(中外

総本山醍醐寺境内に
グループホーム建設
今年中の完成めざす

「お